

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5597号  
11月号  
平成28年11月4日発行  
宮崎県  
宮崎地方気象台



## 【 予報のポイント 】

大陸からの高気圧に覆われやすく、向こう1か月の日照時間は多いでしょう。

## 【 確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	40	40	20
日照時間	九州南部	30	40	30

## 【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、多い確率50%です。

1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並の確率50%です。

### <1 週目の予報> 11月5日(土)～ 11月11日(金)

期間の前半は高気圧に覆われて概ね晴れますが、後半は前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

### <2 週目の予報> 11月12日(土)～ 11月18日(金)

高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

### <3 週目から 4 週目の予報> 11月19日(土)～ 12月2日(金)

高気圧に覆われやすく、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆大豆

---

#### 1 収穫と乾燥

収穫時に大豆の青立ち株や雑草が混じると茎汁で汚損粒の原因になります。青立ち株にはカメムシ被害粒も多いので必ず抜き取りましょう。成熟期は完全に落葉し莢色が黄色から変色後、莢がカラカラと音がする頃です。コンバインで収穫する際は、茎水分を低下させるため、さらに10日程度後の枝がポキポキ折れる時が適期です。なお、茎水分の高い早朝は避けます。

逆に、バインダーや刈払機では衝撃によるロスを防ぐため早朝か夕方に行います。今年は播種の遅れで莢の位置が低いほ場も多いので、泥の混入に注意してください。

高温での乾燥作業は、しわや皮切れを起こすため温度を30℃以下にします。

### ◆ソバ

---

#### 1 収穫と乾燥

バインダーや手刈りでの収穫は、子実の70～80%が黒変した頃の朝夕に行い、10日程度、島立てし、子実が粉状になるまで乾燥します。コンバインでは、80～90%黒変した頃が適期ですが、茎葉に水分が多いと機械に詰まるので注意しましょう。

乾燥は静置式乾燥機等で温度は30℃以下にします。その後は風選し、粒選別機等で夾雑物を除きます。

### ◆麦類

---

#### 1 ほ場の準備

排水良好なほ場を選び、碎土は丁寧に行います。麦は酸性土壌に弱いので、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は1t程度施用し、元肥は地区基準を参考にします。

#### 2 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行います。播種が早すぎると凍霜害を受けやすく、遅れると穂数不足になります。山間部では11月中旬、沿海

部では同下旬から12月始めに行い、周囲や3～5メートル間隔に溝を掘り、湿害対策を行います。

(荒砂 英人)

## 施設野菜

### ◆共通事項

---

気温も下がり、本格的に暖房を開始する時期となります。11月末までは日較差が大きいため、夕方早い時刻から内張ビニルを閉め切って保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。また、日によって最低気温が高い場合もありますので、特にきゅうり、トマト類等、比較的低温で管理する作物については、一定の時刻で内張の開閉を行うのではなく、夜温がそれほど下がらない場合は内張ビニルを閉める時刻を遅くする(場合によっては閉めない)など、状況に応じた管理を行いましょう。

### ◆きゅうり

---

ハウス抑制栽培は子づる及び孫づるの収穫期となりますが、成り疲れにより草勢が低下しやすい時期です。適期収穫を行うとともに不良果は早めに摘果するようにします。かん水は10a当たり1.5～2t/日を目安に行い、追肥は草勢や着果状況に応じて施用します。かん水時に液肥として、10a当たり5～6kg/月の窒素成分を施用します。ハウス内の温度管理は、午前中26～28℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

促成きゅうりは摘心栽培、つる下ろし栽培ともに、植付けの早いものは主枝収穫期から側枝収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが大切です。10℃を目安にできる限り低温での夜温管理を行います。夜温が高い場合は果実肥大を優先せず、内張ビニルを開放し、ハウス内の湿度を下げるなどの対策を行います。追肥は主枝収穫開始と同時に開始し、

10a当たり窒素成分で0.2kg/日を目安に行います。かん水は果実肥大にあわせて行いますが、10a当たり0.8～1t/日を目安に少量多回数でのかん水管理を行います。日中の温度管理は、ハウス抑制きゅうりに準じて行います。

## ◆ピーマン

---

促成ピーマンは、上～中旬にかけて収穫量も多くなり、最初の収穫最盛期を迎えます。作物本体への着果負担も大きく、収穫遅れになると、さらに草勢低下を招き、うどんこ病等の発生を助長しますので、適期収穫を心掛けましょう。草勢維持のため、果実の着果状況に応じてかん水、施肥管理を行いますが、目安として、かん水は10 a 当たり1・2～1・5 t/日、追肥は10 a 当たり窒素成分で0・2 kg/日とします。下旬より収穫の終了した第三分枝のフトコロ枝を順次除去し、通風・採光の改善を図りましょう。

## ◆トマト

---

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトともに収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水と追肥を行いますが、追肥は草勢を見て、大玉トマトで第三果房、ミニトマトで第五果房開花時より開始し、10 a あたり窒素成分で1 kg/1週間（ミニトマトの場合は2割程度増やす）を目安に施用します。ハウス内の温度は、午前中25～28℃、午後22～25℃、夜間8～10℃とします。ミニトマトの夜温は大玉トマトより1～2℃高めに管理します。

## ◆いちご

---

今年は梅雨明け後の高温と台風時の曇雨天等の影響で、花芽の分化が早い傾向でしたが、頂芽の出蕾は遅くなっているようです。夜温管理として、開花肥大期は10～12℃、着色期8～10℃、収穫期7～8℃を目安に、ほ場の生育状況にあわせた温度管理を行ってください。中旬より電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2・5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時まで5分間/時間、暗期中断は深夜1時間程度を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行います。

(黒木 正晶)

## 葉茎菜類及びいも類

### ◆たまねぎ

---

定植時期となります。植付けの深さは3～4 cmで、深植えすると収穫時に縦長球（レモン球）の発生が多くなるので注意が必要です。植付け後3～5日間は株元を中心にかん水を行い、活着を促します。

### ◆らっきょう

---

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10 a 当たり5 kg程度の窒素成分を追肥し、土寄せを行ってください。

### ◆食用かんしょ

---

収穫・貯蔵の時期です。腐敗防止のため、罹病いもや傷いも等は区分して貯蔵します。いもは9℃以下の低温にあたると腐敗しやすく、18℃以上では萌芽します。貯蔵の適温は13℃、適湿度は90%ですので、貯蔵庫の温湿度管理に留意します。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいので一度に大量に入庫すると庫内のCO<sub>2</sub>濃度が上昇したり、湿度が高くなり、結露する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用して結露を防止しましょう。空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気をして庫内を除湿し、新鮮な空気と入れ替えましょう。

### ◆さといも

---

中生種の収穫期となります。自家採種する場合、「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」や「乾腐病」の疑いがあるものについては翌年の種芋としての使用を避け、優良なものだけを子いもが離れないように株毎に保存します。ほ場で保存する場合は低温障害を受けないよう、厚めに培土するなどの対策が必要です。

また、今年の疫病の初発には、残さ処理の不徹底が誘発したと思われる事例がありました。収穫後のさといもの畑の片付けは、残さの分解を進めるため、トラクタ速度を抑え、ロータリー回転を高くし、できるだけ細かく破碎します。また、残さを畑付近の空き地に放棄することは決してしないでください。

(杉村 幸代)

# 果 樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆中晩生かんきつ全般

肥料が十分に吸収されるには、12℃以上の地温が必要とされ、今月がその時期に当たります。年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が、翌年の花芽の充実の有効とされていますので、11月中旬までに施肥を行いましょう。

### ◆完熟きんかん

今年は結果時期が比較的早かったことから、良好な果実肥大が見られます。十分に肥大が確保されている園では、昼温や夜温を徐々に落としていきましょう。肥大不足の園では、秋季加温を継続しましょう。昼温28℃程度を確保し、夜温は18～20℃を確保しましょう。

### ◆マンゴー

花芽分化に向けた管理としては、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度に抑え、夜間の最低気温は6～8℃程度を維持しましょう。根域制限を行っていない園や効果の低い園では花芽分化のために、より低い温度が必要な場合があります。毎年、花芽分化が悪い場合は、最寄りの農業改良普及センターに相談してください。十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。5割程度の花芽発生を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に上げていきます。急速に花芽を生長させると、花粉の形成不良や子房の生育不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を引き起こします。開花が始まるまではできるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生長させましょう。

## 2 果樹園共通

---

防風林や防風ネットの整備は冬の仕事です。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように整理します。防風林が高すぎたり、密閉度が高いと、発芽が遅れたり、アザミウマ類などの害虫被害が多くなるので、注意が必要です。

防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

(山口 和典)

## 花 き

### ◆電照ギク

---

11月になると気温が低下し、結露しやすい状況が続きます。曇雨天で夜温が高いと加温機が作動せず、白さび病が発生しやすくなります。親株床から予防を徹底し、本ほへの持ち込みを防ぐとともに、本ほ内では送風で結露を防ぐなど、各対策を組み合わせることで予防を行いましょう。

年末出荷作型は摘蕾期になります。花首の徒長防止や花のボリュームを出すために摘蕾作業は適期に実施して下さい。

### ◆スイートピー

---

採花が開始されます。天候の変化に十分注意し、曇雨天が予想される場合は液肥・かん水を控えるなど草勢に応じた肥培管理を行って下さい。11月上～中旬は夜間に施設のサイドを閉める気温になります。暖かく湿った空気を閉じ込めると湿度が高まり、結露しやすくなりますので、換気や除湿を行うなど湿度コントロールに努めましょう。

### ◆デルフィニウム

---

中山間地域の一番花の収穫が終了したほ場は、ロゼットを打破させるためにハウスを開放し、低温に遭遇させて下さい。沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用し、茎の硬化を図り、収穫後は適切な前処理を行いましょう。

また、二番花のロゼットを回避するために一番花の花穂伸長の終了時から電照を開始しまししょう。

### ◆トルコギキョウ

---

生育後半の過剰施肥と曇雨天によるブラスチングが多発しますので、追肥は発蕾前には終えましょう。10月に定植したものはチップバーン等が発生しやすい時期になりますので、一時かん水を控え、根域を広げるとともにカルシウム資材の葉面散布や硝酸カルシウム水溶液のかん注処理を行いましょう。

## ◆ラナンキュラス

---

気温、地温が低下してきますので徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図ってください。最低気温が5℃を下回るようになると保温・加温が必要になりますが、昼間は低温になりすぎないように15℃程度を目安にできるだけ換気を行い、品質の向上に努めるとともに増収を図りましょう。

(中村 広)

## 畜 産

### ◆家畜

---

今月は朝晩の冷え込みが厳しくなる時期に入りますので、朝夕の畜舎カーテンの開閉をこまめに行い、畜舎内の温湿度環境の改善を図りましょう。また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温機材の点検と、子牛の保温箱や風よけ等の寒冷対策の準備を行いましょう。さらに、和牛や乳牛は、気候が安定し、生産性が安定する時期ではありますが、飼料作物の収穫と作付けの時期でもあり、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されることから、交配期にある牛については、朝夕の観察の徹底を図りましょう。

豚でも、生産性が安定する時期ではありますが、PED等の疾病予防のため、豚舎の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒も徹底しましょう。

また、鶏については、鳥インフルエンザの発生リスクが高まる時期に入りますので、防鳥ネットの点検補修を行い野鳥や野生動物の侵入を防ぎましょう。また、出入り口の消毒や畜舎周囲への消石灰の散布も定期的に行いましょう。

### ◆飼料作物

---

牛の粗飼料では、飼料稲やソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン・エン麦など（秋冬作物）の作付け時期が重なる時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響が出ないよう計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めましょう。また、イタリアン・エン麦を植え付ける前には、土壌分析を行い、分析結果に基づいた適正な施肥管理（苦土石灰、ヨウリン等）を行いましょう。

(三角 久志)



## 工芸作物

### ◆茶

---

#### 1 寒害・凍害防止対策

冬期の寒害・凍害の防止対策では、防風ネットの設置を行います。また、幼木園では、敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけ畝間中央に寄せるようにします。万が一、幹割れが発生した際は、速やかに株元へ土寄せを行きましょう。

#### 2 病虫害の防除

一番茶前の密度増加に注意が必要なカンザワハダニに対しては、整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら、専用ノズルを用いた適正防除に努めましょう。

また、近年県内茶園でチャトゲコナジラミの発生が確認されています。この害虫は、茶葉の裏に寄生して越冬するため、茶葉の裏面をよく観察し、見慣れない虫を発見した際は、速やかに最寄りの農業改良普及センター等へ連絡してください。

(黒木 清人)

### ◆しいたけ

---

#### 1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで、11月下旬頃までには行いましょう。

また、伐採後は、葉枯らし乾燥を1～2ヶ月程度実施しましょう。

#### 2 発生操作

ほだ起こし時期は品種によって異なるため、最低気温（例 低中温性品種であれば最低気温が10℃前後に下がった時）を考慮して決定しましょう。

また、ほだ起こし後に散水を行うとより発生しやすくなります。

なお、風が強く吹き込むほだ場は乾燥によってしいたけの生育が不良になったり、変形しやすくなるので、防風ネット等を設けると良いでしょう。

(永野 学)

## ◆たばこ

---

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の土壌伝染性病害の菌密度の低減と、土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を10日おきに3回以上行いましょう。

2 耕作予定ほ地の土づくりのため、石灰・ヨウリン等の散布を行い、土壌改良に努めましょう。

石灰散布をする場合は、土壌消毒との間隔を1ヶ月以上あけることが必要となります。

3 土壌消毒を実施する際には、薬害や公害のないように十分注意し、農薬使用基準に則って土壌水分が60%程度（軽く握った時に割れ目が2～3個できる程度）の時期を選んで実施しましょう。

また、土壌消毒剤の空缶は、地域で決められた方法で適切に処理しましょう。

4 良質堆肥（10a当たり1200kg以上）施用に向けて、材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥の投入を避けるために水分60%程度を保ちながら月に1回程度切り返しを行い、堆肥の腐熟促進を図りましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

## 内容の詳細について

---

11の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	並	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入の防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	ハスモンヨトウ	並	10月以降平年よりやや多い状況で推移しています。中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。
	タバココナジラミ	やや多	タバココナジラミには薬剤の効きにくいタイプの発生が確認されていますので、薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は追加の防除を行います。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	並	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病(MYSV)	—	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部施設栽培等で確認されているため注意が必要です。感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し埋却処分するか、完全に枯れるまで密封処理します。
冬春ピーマン	斑点病	並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。黒枯病は、多湿条件で発病しやすいので排水を良好にするとともに、マルチの利用、日中の換気を行います。
	うどんこ病	並	
	黒枯病	やや多	
	シキイロアザミウマ	並	シキイロアザミウマは10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
	ヒラズハアザミウマ	並	
冬春トマト	葉かび病	並	多湿条件下や肥料切れで発生しやすいので、ハウスの換気を良好にするとともに草勢維持に努めます。
	トマト黄化葉巻病(TYLCV)	並	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミによって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り適切に処理します。トマト黄化葉巻病のウイルスの系統はマイルド系統、イスラエル系統の両系統を確認しているため、抵抗性品種を導入しているほ場も注意して下さい。
タバココナジラミ	やや多		
冬春いちご	うどんこ病	やや少	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。炭疽病は、多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	やや多	
	ハダニ類	やや少	収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
アブラムシ類	やや少		
果樹全般	果樹カメムシ類	—	地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
かんきつ類	ミカンハダニ	やや少	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや少	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でないと翌年の一番茶への影響が大きくなります。

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。  
 2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

